

愛知県私立高等学校における男女共学に関する考察

Research on Co-Education in Private Senior High Schools in Aichi Prefecture, Japan

佐藤実芳
Miyoshi SATO

はじめに

愛知県において、第二次大戦後の学制改革で誕生した新制高等学校は、公立ではすべてが男女共学であったのに対して、私立では圧倒的に男女別学が多かった。

高校三原則に基づき男女共学を実施した公立高等学校は、その後数校の女子校が誕生して、男女共学の原則が崩れた後、再び男女共学の方向に進んだ¹⁾。他方、私立高等学校は、徐々に男女共学校が増加していった。

そこで本稿では、私立の新設高等学校の状況及び男子校・女子校がそれぞれ男女共学を導入した理由と背景について検討する。

1. 新設校の状況

戦後、愛知県内では新たに23校（分校・定時制のみの高等学校を含む）の私立高等学校が創設された。そのうち、男女共学校が9校（分校2校を含む）、男子校が8校（分校2校を含む）、女子校が7校（定時制のみの高等学校2校を含む）であった（表1参照）。昭和37年及び38年に複数の高等学校が新設されたのは、終戦後の「ベビーブーム」に対応するため、昭和38年度から3年間、高等学校入学者が急増したからであった。

表1 愛知県の私立高等学校の新設

開校年	男女共学校 又は男子校・ 女子校	校名
昭和27年	女子校	聖霊高等学校
昭和33年	男女共学校	東海同朋大学付属同朋高等学校（現在：同朋高等学校） 日本福祉大学付属立花高等学校（現在：日本福祉大学付属高等学校）

昭和37年	男子校	大同工業高等学校知多校舎 (平成16年4月 大同工業大学大同高等学校名古屋校舎に統合) 安城学園女子短期大学附属高等学校岡崎城西分校 →昭和39年4月 岡崎城西高等学校として独立 名古屋第一工業高等学校春日井分校 (昭和42年3月廃止)
	女子校	東海女子高等学校 (現在: 東海学園高等学校) 守山女子商業高等学校 (現在: 菊華高等学校)
昭和38年	男女共学校	星城高等学校
	女子校	光ヶ丘女子高等学校 聖カピタニオ女子高等学校
昭和39年	男子校	弥富高等学校 (現在: 愛知黎明高等学校)
昭和40年	男子校	中部工業大学附属高等学校 (現在: 中部大学春日丘高等学校)
昭和42年	女子校	一宮林高等学校 (定時制) (昭和56年4月: 成和高等学校と改称、平成9年6月: 廃校)
昭和47年	女子校	林第二高等学校 (定時制) (現在: 誠信高等学校)
昭和51年	男子校	杜若高等学校
昭和58年	男女共学校	享栄高等学校栄徳分校 →昭和60年4月 栄徳高等学校として独立 尾関学園高等学校 (現在: 誉高等学校)
	男子校	三河高等学校 (現在: 愛知産業大学三河高等学校)
昭和59年	男女共学校	名古屋大谷高等学校豊田大谷分校 →昭和61年4月 豊田大谷高等学校として独立
昭和63年	男子校	大成高等学校
平成5年	男女共学校	南山国際中学校・高等学校
平成7年	男女共学校	黄柳野高等学校
令和4年	男女共学校	国際高等学校

昭和40年代までに開校した私立の高等学校は、男女別学校が比較的多かった。その中で、共学校として開校準備をしながら、入学試験実施後に入学者の男女比の極端な偏りから女子校に移行した事例が、東海女子高等学校である。

【東海女子高等学校 (現在: 東海学園高等学校)】

東海学園は、明治21年に浄土宗の僧侶の養成を目的に浄土宗学愛知支校を創設して以来、男子の中等教育を行ってきた。同学園は、明治42年に東海中学校を開校し、広く一般家庭の男子生徒を受け入れるようになり、戦後の教育改革で、昭和22年に東海中学校、翌昭和23年に東海高等学校を発足させた。

大正2年から東海中学校(旧制)の第2代校長を務めた椎尾弁匡²⁾(明治9年-昭和46年)は、

既に明治末期から女子教育に関心を持っていたという³⁾。

学園関係者が女子教育の重要性を早くから唱えながらも、その実現は容易ではなかった。昭和30年、東海学園は、名古屋短期大学と名古屋短期大学附属女子高等学校を運営していた桜花学園から合併の依頼を受け、同年9月9日に理事会が桜花学園合併を承認し、桜花学園は東海学園に吸収合併されることになった。そして名古屋短期大学は名古屋女子短期大学に、名古屋短期大学附属女子高等学校は東海女子高等学校と改称することに決まった。文部省へは、新しく男子部、女子部で申請し、正式に認可されるのを待つ間に、東海女子部として、制服やバッジを新しくし、教師の充実を図るなど教育環境も整備した。その結果、生徒たちは高いプライドを持って、学習・生活態度を一変させたという⁴⁾。しかし、桜花学園から突然白紙撤回・返還が求められ、翌年2月28日に合併を解消することになった。

その後、同学園は自力で女子教育の実現を目指し、昭和37年4月、男女共学の「東海第二高等学校」を開校することになった。しかし入学試験の結果、男子74名、女子205名と入学者の男女比率がアンバランスであることを理由に、急遽、男子は東海高等学校に入学させ、東海第二高等学校には女子のみを入学させることにした。そして2か月後の昭和37年6月に「東海女子高等学校」に改称した。

「男の子も入るといっているので志願したのに・・・」

「なんだか“サギ”にあったみたい・・・」

東海学園史である『ともいきの教え永遠に 東海学園百二十年の歩み』には、入学式後の女子生徒の会話が紹介されている⁵⁾。

東海学園が女子教育を重視した背景には、浄土宗の宗祖法然の男女平等の仏教思念がある。女子の学校教育は、その法然の精神を具現するものであった。同学園には椎尾弁匡をはじめ、女子教育を行うことに意欲のある人物がいたが、理想としたのは「東海高校の女性版」の女子校であった。『ともいきの教え永遠に 東海学園百二十年の歩み』には、「東海第二高等学校」が急遽女子校に変わったことについて、理事会が女子校の新設を認めなかったための苦肉の策とも、女子教育を強く願った起死回生とも書かれている⁶⁾。

2. 男子校に女子部、女子校に男子部の併設

昭和30年代から40年代にかけて、男子校に女子部、女子校に男子部を併設する高等学校が登場する。いずれの高等学校も、男子部と女子部とは異なる教育が提供されていた。

【桜ヶ丘高等学校】

女子校（普通科・商業科）であった桜ヶ丘高等学校（現在：桜ヶ丘高等学校）は、昭和31年に地元の強い要請に応じて、男子部開設のための校舎を建設し、昭和32年に男子部を開設した。『愛知県私学協会 二十年史』には、「本学園の教育は、私学としての自由な立場から、学園内の学習活動を男女別学で実施し、生徒会活動とクラブ活動は、男女合同で実施している」⁷⁾と記されている。同じ普通科であっても、男子部普通科では「騎士道精神をもつ男子の育成と、大学進学を目標」⁸⁾にした指導を行い、女子部普通科では「心豊かな女性を目標に、女らしく素直な生徒

の育成」⁹⁾をめざして大学進学と就職希望の両者に対応した指導を実施していた。

同校の場合、同じ敷地内（豊橋市東郷町）に男子部の校舎を建設したものの、男子入学希望者の増加に伴い昭和34年には、現在地の同市牛川町に男子部を移転させた。次いで37年度より女子普通科も同地に移転させ、東郷町の校舎を南校、牛川町の校舎を北校と呼んだ。昭和36年4月には、昭和29年3月に休校となった桜ヶ丘中学校を南校で再開し、昭和38年4月に、男女共学の音楽科を開設した。そして昭和40年3月に中学校も含めて牛川町に全学を統合して、「総合高校としての基礎」¹⁰⁾を築いた。

【名古屋商科大学付属高等学校】

男子校（普通科・商業科）であった名古屋商科大学付属高等学校（現在：名古屋国際高等学校）は、昭和38年4月に女子部（普通科・商業科）を併設した。『愛知県私学協会 二十年史』には、「女子では、普通科を一般コース（進学）、職業コース（就職）、商業科を簿記・会計コース、秘書コースの二コースずつに分けそれぞれ、その特色を生かすことに重点が置かれている」¹¹⁾と記されている。

【豊川高等学校】

男子校（普通科：全日制・定時制）の豊川高等学校は、昭和33年に商業科（全日制）を増設し、更に昭和40年に全日制女子部（普通科・商業科）を新設した。女子部の特徴として、「生徒の実態、地域社会の要求に応じ特に家庭科教育に必要な施設教材等の充実を図り、従来の普通課程、商業課程の中に家庭科単位数の増加、内容の充実」¹²⁾が図られた。

【弥富高等学校】

弥富高等学校（現在：愛知黎明高等学校）は、昭和39年4月に入学定員普通科100名、機械科200名の男子校として誕生した。その2年後、昭和41年4月に女子生徒のみを対象とする昼間定時制衛生看護科（80名）を新設した。同科は、看護師として必要な基礎的専門教育を行い、4年間で高等学校卒業資格と同時に准看護師試験の受験資格を取得することができた。『愛知県私学協会 三十年記念誌』には、次のように記されている。

この昼間定時制課程は、全国でも数少なく、生徒の出身地は全国にまたがり、県内（主として名古屋市内）の病院、医院に勤務し、働きながらスクールバスで通学している。

人命をあずかる重要な仕事に将来従事するので、基礎的知識技術の習得とともに、看護師としてふさわしい豊かな人間性の陶冶に力を入れている。¹³⁾

弥富高等学校は、当時その地域に高等学校が皆無という理由で創設された。男子は機械科で技術者として養成されるのに対して、女子は衛生看護科で准看護師として養成されるというように、性的役割分業が明確であった当時の社会に対応する専門学科を増設したと考えられる。

3. 昭和 40 年代及び 50 年代の愛知県の私立高等学校における男女共学の動き

昭和 40 年代から 50 年代には、男子校（愛知工業大学名電高等学校と中部大学春日丘高等学校）が女子生徒を受け入れていたが、共学といえるほどの女子生徒数ではなかった。当時は両校とも、普通科が併設されているものの工業系の専門学科が中心という特徴があった。但し、中部大学春日丘高等学校はその後、工業系の専門学科を廃止して男女共学の普通科のみの高等学校へと変貌した。

【愛知工業大学名電高等学校】

昭和 44 年度から、名古屋電気工業高等学校（現在：愛知工業大学名電高等学校）は、普通科のみ女子生徒を受け入れた。しかし女子生徒数が増加することはなく、女子生徒が占める割合は全校生徒の 1% 未満であった（表 2 参照）。

表 2：名古屋電気工業高等学校の生徒数

	昭和 45 年	46 年	47 年	48 年	49 年	50 年	51 年	52 年	53 年	54 年
全生徒数（人）	3458	3112	3112	3432	3449	3458	3438	3418	3383	3172
男子生徒数（人）	3433	3087	3084	3409	3425	3433	3415	3394	3352	3147
女子生徒数（人）	25	25	28	23	24	25	23	24	21	25

『全国高等学校一覧』昭和 45 年度～昭和 54 年度より作成

同校の場合、普通科に本格的に男女共学を導入したのは、平成 4 年 4 月である。その後、平成 14 年に全学科（普通科、電気科、電子科、機械科、情報科学科）が男女共学となった¹⁴⁾。

【中部大学春日丘高等学校】

名古屋第一工業高等学校春日井分校¹⁵⁾が廃止され、昭和 40 年に中部工業大学付属高等学校（現在：中部大学春日丘高等学校）が誕生した。入学定員は、昭和 50 年度までは普通科 80 人、機械科 80 人、電気科 80 人の合計 240 人であったが、その後昭和 53 年に電気科を廃止し、平成 4 年には機械科も廃止して、普通科のみの高等学校に変貌した。

同校の場合、開校当初より例外的に女子生徒の入学を認めていた（表 3 参照）ため、昭和 47 年まで少数ではあるものの女子生徒が在籍していたが、それ以降昭和 57 年まで女子生徒が入学することはなかった。その後昭和 58 年度より、正式に女子生徒を募集するようになった。同校では、昭和 55 年頃から近い将来到来する 15 歳人口の急増急減対策の必要性と、中部工業大学の学部増設や中部工業専門学校の設置、女子短期大学の設置構想から、普通科中心の男女共学校を目指すようになったという¹⁶⁾。昭和 58 年度入学志望者 2058 人のうち女子が 474 人、入学者 609 人のうち女子が 169 人であった。その後も女子生徒数は増加していった（表 4 参照）。

表3：中部工業大学附属高等学校の生徒数（昭和41年～昭和49年）

	昭和41年	42年	43年	44年	45年	46年	47年	48年	49年
男子生徒数（人）	501	857	961	1049	1192	1111	1135	1176	1178
女子生徒数（人）	0	1	1	1	0	4	4	0	0

『全国高等学校一覧』昭和41年度～昭和49年度より作成

表4：中部工業大学附属春日丘高等学校（昭和58年4月に改称）・中部大学附属春日丘高等学校（昭和59年4月に改称）（昭和58年～平成3年）の生徒数

	昭和58年	59年	60年	61年	62年	63年	平成元年	2年	3年
男子生徒数（人）	1201	1208	1144	1126	1186	1368	1352	1234	1070
女子生徒数（人）	169	327	460	459	504	552	691	654	637

『全国高等学校一覧』昭和58年度～平成3年度より作成

同校の場合、普通科志願者の急増に対応し、志願者が減少し始めていた電気科を昭和53年3月に廃止（昭和48年度以降生徒募集停止）した。そして、生徒急減期を目前に控え将来構想として普通科中心の共学化が目指された。同校の機械科は優れた施設設備で人気が高い学科であったが、全国的に工業志向の生徒が減少してきたことで、平成元年4月1日より同科の生徒募集を停止した。

4. 同一学園設立の男女別学校

女子高等学校を運営する学校法人が男子高等学校を創設した例が2例ある。いずれも、開校した男子校の教育目的は、女子校のものとは大きく異なっていた。

(1) 安城学園

安城学園は、明治39年に寺部三蔵と寺部だいが裁縫塾を開いたのが始まりである。明治45年に、安城裁縫女学校を設立して、正式に学校教育を開始し、その後大正6年に安城女子職業学校と校名変更した。大正13年に財団法人安城女子職業学校を設立し、さらに昭和5年には財団法人安城女子専門学校を設立し、安城女子専門学校を開校した。戦後の教育改革で、昭和23年に安城女子職業学校を安城学園女子高等学校へと組織変更を行い、安城学園女子中学校（昭和58年廃止）を開校した。

同校は、普通科、家庭科（生活科学科）の他に、別科として家庭科（2年制：和洋裁科、1年制：洋裁科）を併設していた。同学園は、昭和25年に安城学園女子短期大学（現在：愛知学泉短期大学）、そして昭和41年に愛知女子大学（現在：愛知学泉大学）を開校し、女子の中学から大学に至るまでの一貫教育を目指した。

昭和37年、学校法人安城学園が創立50周年に当たるのを機に、地域からの高等学校創設の強い要望を受けて、西三河の中心地である岡崎市に安城学園女子短期大学附属高等学校岡崎城西分校（男子校：普通科）を開校した。当時、西三河唯一の私立普通科男子高等学校で、「社会に有

用な人材の開発—知識・技能修得のための知能を啓発し、身体練磨に努めることによって剛毅闊達な主体性のある若人を育成する」¹⁷⁾ことを目指した。同分校は昭和39年に、岡崎城西高等学校として独立した。

(2) 足立学園（愛知真和学園）¹⁸⁾

足立学園は足立閻勗と足立てる子が、宗教的情操教育を志し昭和2年3月稲沢高等女学校を設置したのが始まりである。同校は学制改革により、稲沢高等学校（現在：愛知啓成高等学校）を開校した。同校は「報恩感謝の心を持ち、国際感覚豊かな近代女性の育成」¹⁹⁾を教育目的とし、自己自身の心と身体を大切に磨き、世の為人の為に尽くす女性が一生幸福に過ごせるという人生観を養うことを目指した。

同学園は、昭和26年に稲沢女子短期大学（現在：愛知文教短期大学）、昭和31年4月に稲沢幼稚園（現在：愛知文教女子短期大学附属第一幼稚園）、昭和42年4月に萩原幼稚園（現在：愛知文教女子短期大学附属萩原幼稚園）を設置し、平成10年に愛知文教大学を開学して、女子の総合学園を築いた。

その一方、同学園は昭和63年4月に、進学と人間形成に最重点を置く男子校である大成高等学校を設立した。校訓は「報恩感謝・自学自修・質実剛健」で、開校以来全国に通用する進学校を目指した。

5. 男女共学への移行 —東邦高等学校の場合—

東邦商業学校は、「教育二關スル戦時非常措置方策」により、昭和19年度以降商業学校としての生徒募集が停止され、大同工業学校北校舎として定員100名の新入生を募集することになった。東邦商業学校としては、昭和19年、20年の2年間、新入生を迎えることはなかった。昭和21年に旧制の東邦中学校が設立され、新入生を迎えたが、昭和22年度の生徒募集を見送り、昭和23年度に新制高等学校が発足するのを待って、新制中学校、新制高等学校を同時に設立したが、どちらも男子校であった。

東邦高等学校の場合、男女共学への移行の問題は、早い段階から取り上げられていた。昭和34年2月25日付の『東邦新聞』の「月遅れ新春放談」において、司会者が男女共学にする意志の有無を尋ねている。それに対して当時の校長である下出貞雄は関心がないと答え、他の出席者からは、共学にしたとしても元男子校に女子があえて入学しないであろうし、数人の女子では様にならないとの会話が載せられている。ただし、「共学への情熱強し！」という漫画が掲載され、当時の生徒たちの男女共学への関心の高さを示している²⁰⁾。

昭和43年に作られた学園の将来計画検討委員会の中間報告でも、「男女共学・・・原則的共学賛成、しかし女子教育には未知の分野ばかり、慎重な調査と検討が必要である」²¹⁾と、男女共学に賛成の姿勢が示された。

昭和46年に平和が丘へ移転後、生徒の通学範囲が狭まったこと²²⁾と、公立高等学校が新設されたことの影響を受けて、入学を希望する生徒数が減少した。そこで生徒募集の方策として浮上

したのが男女共学であった。既に当時の保護者の多くが、中学や高等学校で男女共学を経験していたため、その経験から男子校に入学させることへの不安の声が届いていたことも、男女共学を検討する力となった。更に男女共学の議論に影響を与えたのが、昭和52年の夏の甲子園での坂本投手の活躍により、多くの女子中学生から入学希望が寄せられたことであったという。

男女共学検討委員会が正式に発足したのは昭和53年で、共学にすべきという提示がなされた。その理由は、「男女共学ということが教育の三原則にもあり、本来の姿は男女共学であるはず」ということがあげられている。その後、男女共学に移行することについての議論を繰り返す一方、既に男女共学を実施している高等学校を視察しその実態を学ぶなどの準備を重ねた。そして建学の精神からも「時代が大きく変わった。・・・かつての男子社会では男子だけがいわゆる生産の主体であったが、女子も社会的に大きく進出してくるということがある以上、やはり建学の精神から照らしても、女子も教育の対象とし、共学にしないと建学の精神にもとるのではないか」²³⁾との積極的な意見が出された。

昭和56年、「学園将来構想企画委員会」がつくられ、そこでも男女共学について論じられ、最終的に男女共学の導入が決定された。共学の準備のために、昭和57年に「共学実行委員会」がつくられ、2年間の準備期間の後、昭和60年度から男女共学が実施された。

昭和60年度の入学試験には、1000人以上の女子が受験し、その日の『朝日新聞 夕刊』には、「『禁制』解けて女子殺到」という見出しの記事が掲載された。合格者は男子が464名、女子が422名と、同程度の男女比となった。男女共学2年目以降は、女子の入学者が男子を上回ることとなった。その理由として、推薦入試の導入及び東邦短期大学の併設²⁴⁾と、自由な校風²⁵⁾が女子生徒に受け入れられたと考えられる。

女子生徒を指導した経験がない教師たちは、女子生徒の対応に苦慮する一方、屈託のない“自然体”の生き方、積極的に自分を表現する旺盛な自己主張意識が強く印象づけられたという。東邦高等学校の自由な気風を求めて入学してきた女子生徒が多かったこともあり、生徒たちはスムーズに学校生活に馴染んでいったという。

女子生徒の入学により男子生徒にも変化が見られた。男子生徒の情緒が安定して教室の物損等の問題行動が減少した一方、男子だけの運動部では選手が揃わないなど、個性の発揮や活躍が見られなくなる面もあった。その点に関しては、初めて迎えた女子生徒に関心が傾き、男子生徒の教育がいささか疎かになったと考えられた。ともあれ東邦高等学校の場合、共学の実施は予想以上の成功を収めることができた。

東邦学園の創始者である下出民義（文久元年－昭和27年）は、建学の精神を「真に信頼して事を任せうる人格の育成」とし、「真面目」を校訓とした。同校の場合、男女参画社会への移行と共に女性の社会進出という社会の変化に伴い、女子生徒に門戸が自然に開かれたといえる。

6. 男女共学の新設校の増加

昭和50年代後半以降、私立の新設高等学校は男女共学が多くなる。しかも三河高等学校（現在：愛知産業大学三河高等学校）のように、男子校として創立されてもその直後に男女共学を実施し

たケースもある。三河高等学校の場合、昭和 58 年に男子校（普通科・電気科）として開校された。しかし 2 年後の昭和 60 年に男女共学の情報処理科を新設し、その翌年からは普通科も男女共学に変更し、その後女子生徒数が増加した（表 5 参照）。

表 5：三河高等学校の生徒数

	昭和 60 年	61 年	62 年	63 年	平成元年	2 年	3 年
全生徒数（人）	1425	1498	1719	2035	2296	2374	2214
男子生徒数（人）	1397	1428	1579	1766	1911	1908	1747
女子生徒数（人）	28	70	140	269	385	466	467

『全国高等学校一覧』（昭和 60 年度～平成 3 年度）より作成

終わりに

戦後、私立の男女共学高等学校が複数校新設されたものの、男女の性的役割分担が明確な時代においては、男女共学は既存の私立高等学校で導入されなかった。戦前からの伝統のある高等学校では、教育目的、教育方針、教育内容が男子生徒向きと女子生徒向きで明確に異なっていたからである。そのため昭和 30 年代から 40 年代において、男子高等学校に女子部又は女子高等学校に男子部を併設するという場合でも、男子部と女子部では教育目的等が異なるものであった。

昭和 40 年代から 50 年代には、普通科があるものの工業系の専門学科を中心とする男子高等学校（愛知工業大学名電高等学校と中部大学春日丘高等学校）が女子生徒を受け入れたが、男女共学といえるほどの女子生徒が入学しなかった。しかし、中部大学春日丘高等学校が工業系の専門学科を廃止して男女共学の普通科のみの高等学校になると、女子生徒が多く入学するようになったことから、当時の女子生徒は工業系のイメージがある学校には近寄りたいたころがあったのではないかと考えられる。

昭和 60 年に、名古屋市内にある東邦高等学校が全校一斉（普通科、商業科）に男女共学へ移行して成功を取めたことは、その後、他の私立高等学校の男女共学の導入に大きな影響を及ぼしたと考えられる。また、愛知県内の私立高等学校は県内全私立高等学校の入学試験日が同一であったのが、入試制度の改革により昭和 61 年度より複数受験が可能となるなど、私立高等学校が新しい局面を迎えることになった。昭和 61 年度以降の私立高等学校における男女共学の導入は徐々に広がり、戦後 35 校あった男子校・女子校は、令和 4 年 4 月の段階では 15 校になった。

私立高等学校の共学化の背景としてまずあげられるのは、少子化時代における入学者の獲得という経営面の課題である。男子校の場合は男子生徒のみ、女子校の場合には女子生徒のみに限定されるのに対し、共学校の場合には性別に関係なく幅広く入学者を募集することができるからである。

しかし、それだけとはいえない。日本国憲法により男女平等が謳われたものの、真の男女平等が実現していたわけではない。昭和 47 年に男女雇用機会均等法が制定され、更に平成 11 年には

男女共同参画社会基本法が制定されたことなどにより、男女の意識差が徐々になくなってきている。また、小学校から男女共学で過ごすことにより、男女が共に学校生活を送るのが自然であるという意識もひろまってきた。つまり、男女共同参画社会への対応というのも、私立高等学校が共学を導入する背景となっていると考えられる。

そのことは、男女共同参画社会へと変化するにしたがって、女性の社会進出という時代の要請にこたえる形で、男子校が先に共学化していったことから明確である。男女共同参画社会の実現という社会の流れの中で、男女平等の意識が高い女子生徒が、男子生徒と同じ学校で共に学びたい、自分の能力を試してみたいと、共学に移行した元男子校に入学した。逆に、女子校には校風や教育内容などで男子生徒が魅力を感じる点があり多くなかったといえる。女子校が共学に移行する際には、新しい学科、スポーツなどで従来にない特色を打ちだしている場合が多い。

もちろん、男子校・女子校には、共学校にはない良さがある。その時代や社会情勢、更には保護者・生徒の要望に応えることができれば、共学校に加え男子校・女子校共に存在していくことができるであろう。

注

- 1) 拙稿「愛知県公立高等学校における男女共学に関する考察：家政科設置の『女子高校』の事例研究（その1）」『愛知淑徳大学論集 教育学研究科篇』第4号、平成26年、55-69頁、「愛知県公立高等学校における男女共学に関する考察：家政科設置の『女子高等学校』の事例研究（その2）男女共学の学校から女子校に転換した分校の事例」『学び舎 - 教職課程研究 -』第9号、平成26年、37-50頁、「愛知県立高等学校における男女共学に関する考察（その3）」『愛知淑徳大学論集 - 文学部篇 -』第44号、平成31年、89-97頁、を参照のこと。
- 2) 東海学園宗学愛知支校第3期卒業で、その後旧制第一高等学校を経て、東京帝国大学哲学科を卒業し、宗教大学（現在：大正大学）の教授となる。そして大正2年3月から大正9年1月迄、東海中学校の校長を兼務した。昭和38年に開学した東海学園女子短期大学（現在：東海学園大学）の初代学長でもある。
- 3) 東海学園創立百周年記念出版委員会編『東海学園創立百年史』、学校法人東海学園、昭和63年、427頁。
- 4) 和木康光『ともいきの教え永遠に 東海学園百二十年の歩み』、中部経済新聞社、平成20年、202頁。
- 5) 同上書、220頁。
- 6) 同上書、219-220頁。
- 7) 愛知県私学協会二十年史編集委員会編『愛知県私学協会 二十年史』、愛知県私学協会、昭和43年、346頁。
- 8) 愛知県私学協会三十年誌編集委員会編『愛知県私学協会 三十年記念誌』、愛知県私学協会、昭和53年、253頁。
- 9) 同上書、253頁。

- 10) 愛知県私学協会二十年史編集委員会編、前掲書、345 頁。
- 11) 同上書、391 頁。
- 12) 同上書、380 頁。
- 13) 愛知県私学協会三十年誌編集委員会編、前掲書、241 頁。
- 14) 令和 4 年 4 月 1 日現在においては、専門学科は情報科学科、科学技術科に改変されている。
- 15) 同分校の開校時は機械科・電気科であったが、昭和 39 年 4 月に普通科が増設された。
- 16) 大西良三編『三浦学園六十年史』、学校法人三浦学園、平成 11 年、506-508 頁。
- 17) 安城学園創立百周年記念誌実行委員会編『安城学園百年誌』、学校法人安城学園、平成 26 年、280 頁。
- 18) 平成 18 年 4 月に、学校法人足立学園より愛知啓成高等校、大成高等学校、大成中学校、愛知文教女子短期大学附属第二幼稚園が分離され、現在は愛知真和学園が運営している。
- 19) 創立 50 周年記念事業委員会・50 年史編纂委員会編『愛知県私学協会五十年史』、愛知県私学協会、平成 10 年、212 頁。
- 20) 東邦学園編『真面目の大旆 東邦学園 70 年のあゆみ』、学校法人東邦学園、平成 5 年、331 頁。
- 21) 東邦学園編『東邦学園 50 年史』、学校法人東邦学園、昭和 53 年、309 頁。
- 22) 名古屋市東区赤萩の頃の通学範囲は、交通の便の良さから JR 中央線沿線や名鉄各線の沿線など広範囲にわたっていたが、昭和 46 年に名東区平和が丘に移転した後、名古屋市東郊一帯からの通学が増えた。
- 23) 東邦学園編『真面目の大旆 東邦学園 70 年のあゆみ』、学校法人東邦学園、平成 5 年、335 頁。
- 24) 東邦短期大学は、昭和 40 年に男女共学の短期大学として開学した。
- 25) 東邦高等学校は、愛知県内で最初に（昭和 40 年頃）着帽を廃止した学校である。全体的、一律的に規律を強いることはせず、服装に関しても細かくは規定しないことなどがあげられる。

主要参考文献

1. 愛知県私学協会二十年史編集委員会編『愛知県私学協会 二十年史』、愛知県私学協会、昭和 43 年。
2. 愛知県私学協会三十年誌編集委員会編『愛知県私学協会 三十年記念誌』、愛知県私学協会、昭和 53 年。
3. 朝日新聞名古屋本社編集制作センター編『享栄学園七十年史』、学校法人享栄学園、昭和 58 年。
4. 安城学園創立百周年記念誌実行委員会編『安城学園百年誌』、学校法人安城学園、平成 26 年。
5. 大西良三編『三浦学園五十年史』、学校法人三浦学園、平成元年。
6. 大西良三編『三浦学園六十年史』、学校法人三浦学園、平成 11 年。
7. 大西良三編『三浦学園六十年史 資料編』、学校法人三浦学園、平成 11 年。
8. 桜丘学園創立 60 周年記念事業実行委員会編『桜丘学園写真で見る 60 年のあゆみ』、学校法

人桜丘学園、昭和60年。

9. 創立50周年記念事業委員会・50年史編纂委員会編『愛知県私学協会 五十年史』、愛知県私学協会、平成10年。
10. 創立100周年記念誌編集委員会編『学校法人享栄学園創立100周年記念誌：誠實で信頼される人に』、学校法人享栄学園、平成25年。
11. 東海学園創立百周年記念出版委員会編『東海学園創立百年史』、学校法人東海学園、昭和63年。
12. 東邦学園編『東邦学園50年史』、学校法人東邦学園、昭和53年。
13. 東邦学園編『真面目の大旆 東邦学園70年のあゆみ』、学校法人東邦学園、平成5年。
14. 名古屋電気学園創立六十年史編集委員会編『名古屋電気学園創立六十年史：故 後藤鉀二前学園長を偲ぶ』、学校法人名古屋電気学園、昭和47年。
15. 名古屋電気学園百年史編集委員会編『名古屋電気学園100周年記念誌：1912-2012』、学校法人名古屋電気学園、平成24年。
16. 和木康光『ともいきの教え永遠に 東海学園百二十年の歩み』、中部経済新聞社、平成20年。